

保井 志之 D.C.

整骨院での修業時代、私は
整復術や包帯法に魅了されて
おり、そのままいけば、柔道
整復師の道を歩んでいたで
しょう。しかし、

その頃、時代は

転換期を迎え、

急性外傷の患者

さんの多くが、

整形外科病院を受診するよう

になってきました。整骨院に

来院される外傷の患者さんは

徐々に減り、慢性症状を抱え



保井志之D.C.

(2) 手技療法を極めたいという思い

ている患者さんが増えてきて
いました。この先、本来の柔
整の業務とは異なる、慢性症
状の患者さんたちが多くなる

という、未来への職業的な不
安も芽生えていました。

そんな状況の中で、私の手

技療法への関心はさらに高ま

り、急性腰痛や寝違え、さら

には慢性症状の患者さんを、

骨折や脱臼を治療する整復術

のような手技療法で治せない

だろうかと思案していまし

た。その整骨院では、大きな

研究会を主催しており、研究
発表の花形は、やはり本来の
柔道整復師の業務である骨折
や脱臼の症例報告でした。そ
こで修行している書生や先輩
方には、「ほねつぎ」として
は一流の整復術や包帯法を習
得し、一流の研究をしている
という自負がありました。

一方、骨折や脱臼以外の捻
挫や打撲の症例においては、

部位別に、冷シップをし、包

帯で固定するのが「お決まり

の治療法」でした。また、慢

性腰痛などは、患部に低周波

をあてながら温シップ、次に

自家製の軟膏をすりこむよう

にほぐし、最後にもう一度、

赤外線などの電気療法を施し

ていました。

多くの患者さんはこの治療
で癒され、満足して帰られま
した。今考えると、施術だけ
ではない、整骨院の雰囲気や
院長の人間味が反映されてい
たのでしょうか。だからこそ、
院の評判がよく、大勢の患者
さんが訪れていたのだと思い
ます。

しかし、慢性症状に対して
は「治す治療」というよりも、
いわゆる「対症療法」でした。
なぜ効果があるのか、なかつ
たのかという本質の理解には
関心が向けられていませんで
した。

その当時の私の関心事は
「慢性症状をいかにして手技
療法で治すか」ということ。
現在目指している「本質的治
療」とはまだまだかけ離れて
いました。(次号に続く)